

氏 名	やまぐち たかよし 山 口 哲 由
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 33 号
学位授与の日付	平成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 東 南 ア ジ ア 地 域 研 究 専 攻
学位論文題目	中国雲南省の山地環境におけるチベット人の農牧複合と移動牧畜に関する研究

論文調査委員 (主 査) 助教授 岩 田 明 久 教 授 太 田 至 教 授 山 田 勇

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国雲南省の山地環境に住むチベット人を対象として、農牧複合と移動牧畜の実体を詳細に調査し、この地域における放牧地利用の特徴を解明することを目的とした。中国では1980年代初頭の生産責任制導入後、家畜が私有化される。その過程で、牧畜地域における生産性の低さと放牧地の荒廃を解消するために放牧地を私有化し、利用者を固定するとともに家畜頭数を制限することでこれらの問題を解決する試みが行われてきた。しかし、このような私有化政策と現行の牧畜活動の間に生じる問題点が指摘されるに至っている。その大きな原因のひとつに放牧地利用に影響を及ぼす要因を明らかにした研究が少なく、それらのほとんどが乾燥平原環境を対象としていて、山地環境をはじめとする多様な地域で展開される牧畜の現状が把握されていないという点があげられる。本論文はこのような背景のもとに長期のフィールドワークに基づく調査をとおり山地環境における放牧地利用の詳細を明らかにするとともに、その特徴を解明して上記の課題に資する研究をおこなった。

本論文は考察を含めて6つの章から構成されている。第1章は中国における牧畜の私有化政策をレビューし、その政策によって生じた問題点を指摘している。そして、先行研究が特に少ない中国山地環境での牧畜研究の意義を述べ、さらに本論文の研究手法と構成を記述した。

第2章では、調査対象地域である中国雲南省迪慶チベット族自治州シャングリラ県のチベット地域内における位置づけをおこない、地形、気候、植生、専門的生業を示す。そのうえで、本県での農業政策の変化と調査村に選定したウォンシャン村とホンボ村の現在における生業を詳述する。これらの村の間には耕作面積や飼育する家畜種に違いがみられ、ホンボ村は耕地面積がより広く、ウシとヤク・ウシ雑種がより多く飼育され、反対にウォンシャン村ではよりヤクの頭数が多いことを明らかにしている。

第3章では、チベット地域の主要生業である農耕と牧畜を理解するための鍵となるウシ亜科の民俗分類とそれらの用途に焦点をあてる。雌・雄のヤク、雌・雄のF1、雌・雄のウシに相当する6つのカテゴリーがあり、形態的・生理的特徴により、それらの用途は明瞭に異なることを示している。

第4章では、農牧複合と放牧地利用の実状を、前章で明らかにした民俗分類のカテゴリーをもとに解析する。この地域における家畜飼養は、村周辺の農耕に結合した2頭の雄F1と雌ウシ3頭を飼養する基本形態と、乳や肉を生産するために山間放牧地を利用して多数のヤクと雌F1を移動牧畜によって飼養する形態に区分できる。これらの家畜群間で交配がおこなわれることにより互いの構成種が成立している。次に両村間で認められた家畜種の飼養形態および家畜種の飼養形態と村内に滞在する期間の違いを分析し、世帯の作付け面積と村内に通年滞在する家畜の頭数には正の相関があり、村内での家畜収容力を越えた頭数の家畜が山間地移動牧畜で飼養されるという仮説を提示する。

第5章では、どのような環境を反映して山間地移動牧畜による放牧地利用がなされているのかを参与観察によって精査する。ヤクは暑熱に弱く、逆にウシは寒冷に弱い。このような生理的特徴が村落と山間地移動牧畜での家畜種を決定している。

放牧地として標高 4200m 以上の高山草原帯が高く評価されるものの、利用できる期間が夏の短期間に制限されるため、低灌木帯や針葉樹林帯も放牧地としての価値を有し、季節変化の中で山間地環境の利用形態が規定されることを明示している。

第 6 章では、チベット地域の域内区分であるカム地方における標高 4000m 以上の平原でおこなわれている専門的牧畜と、標高 2500m 以下の農業を主体とする地域での牧畜とを比較し、本調査地域にみられる家畜飼養は高低差の大きな地形的特徴の中で、専門的牧畜と農耕地域での家畜飼養を同時に実現しているという地域の特徴を抽出する。最後に、中国における放牧地の私有化政策に対し、山地環境における適切な牧畜政策を立案するためには、標高・家畜種・牧草・農耕の実状を正確に把握することが必要であると言及する。

論文審査の結果の要旨

家畜飼養はタンパク源の供給を司る一大産業としてフードセキュリティの一翼を担っている。この点で家畜飼養は人類に共通する意味を持つ一方、多くの場合に家畜の飼養形態は、当該地域の環境特性に強く規定されるという特性を有している。さらに、経済的に重要なばかりでなく、社会的・政治的諸問題とともに、放牧地確保のための環境改変による森林減少や砂漠化など、環境面でも今日的課題を内包するものであり、世界各国がこの産業に対して政策を講じてきた。広大な国土と夥しい数の人口を有する中国もその例外ではない。1980年代初頭に生産責任制が導入され、家畜の私有化とともに、牧畜地域における生産性の低さと放牧地の荒廃を解消する目的で放牧地を私有化し、利用者の固定と家畜頭数の制限によりこれらの問題を解決する政策がとられた。しかし、私有化政策と現実におこなわれている牧畜活動の間に齟齬が指摘され、この政策の有効性を問い直す必要性が生じている。本論文は中国雲南省迪慶チベット族自治州シャングリラ県での長期にわたるフィールドワークに基づく事例研究をとおして、山地環境における放牧地利用の詳細を明らかにするとともに、その特徴を解明して上記の課題に資する研究をおこなったものであり、以下の諸点において優れた成果として評価できる。

1. チベット地域においてウシ亜科のヤク、ウシおよびそれらの雑種はチベット人の農耕や牧畜のさまざまな局面において重要な役割を果たしている。本研究では、2つの調査村における110の交配事例からウシ亜科家畜の民俗分類名称を収集して詳細な交配系統図を作成し、累代交配による民俗分類名称の変化を明らかにするとともに雌・雄のヤク、雌・雄のF1、雌・雄のウシに相当する6つのカテゴリーの存在とそれらの用途の違いを明確に解明した。

2. 本調査地域での農牧複合と放牧地利用の実状を、自らが明らかにした民俗分類のカテゴリーをもとに解析した。その結果、この地域の家畜飼養は、村周辺の農耕に結合した2頭の雄F1および雌ウシ3頭を飼養する基本形態と、乳や肉を生産するために山間放牧地を利用して多数のヤクと雌F1を移動放牧によって飼養する形態に大別でき、これらの家畜群間が交配することにより互いの構成種が成立していることを明らかにした。

3. 本調査地域における2村で認められた家畜種の飼養形態および村内に滞在する期間の違いを分析し、世帯の作付け面積と村内に通年滞在する家畜の頭数には正の相関があり、村内で通年飼養できる頭数を越えた数の家畜を飼養するために山間地移動牧畜がおこなわれるという仮説を提示してその解答を得ることに成功した。

4. 山間地移動牧畜で飼養される家畜種と放牧地利用がどのような条件を反映してなされているのかを参与観察によって精査した。その結果、ヤクは暑熱に弱くウシは寒冷に弱いという家畜種ごとの生理的特徴が、村落周辺と山間地における家畜種を決定していること、放牧地としては標高 4200m 以上の高山草原帯が高く評価されるものの、利用できる期間が夏の短期間に制限されるので、低灌木帯や針葉樹林帯も放牧地としての価値を有していることを明らかにし、家畜種の生理的特性と、山間地における季節的環境の変化によって放牧地の利用形態が規定されることを明快に示した。

5. 本調査地域はチベット地域の域内区分であるカム地方に属している。文献調査からこの地方でおこなわれている牧畜形態を示したうえで、本調査地域のそれと比較した結果、本調査地域にみられる家畜飼養の様式は高低差の大きな地形的特徴の中で、村落内の飼養と山間地移動牧畜の双方をおこなうことにより、標高 2500m 以下の農業を主体とする地域での家畜飼養と標高 4000m 以上の平原でおこなわれている専門的牧畜とを同時に実現している牧畜形態であるという地域の特徴を抽出することに成功した。

6. 本研究で得られた研究成果をもとに、中国山地環境における放牧地の私有化政策を適切におこなうためには標高・家畜種・牧草・農耕の実状を正確に把握する必要があるという具体的な指針を示した。

以上のように本論文は、中国雲南地域における牧畜を題材とした地域研究として高く評価できるのみならず、中国の畜産業の将来を考える上で貴重な実証的資料を提供している点においても優れた業績である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成18年2月6日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。